福岡城　下ノ橋御門

福岡市博物館
Fukuoka City Museum

第26回新収蔵品展

ふくおかの歴史とくらし

平成26年12月9日（火）～平成27年1月18日（日）

特別展示室Ａ

開催にあたって

福岡市博物館は、昭和五十八（一九八三）年に発足した博物館建設準備室以来、数多くの皆様のご協力をいただきながら資料の収集を続けてまいりました。その成果として、考古・歴史・民俗・美術の各分野にわたる収集資料数がこれまでに一二万五〇〇〇件以上にのぼりました。

収集した貴重な資料を後世にまで確実に保存し、展示や研究に有効活用するため、当館では新たに収蔵されるすべての資料について、整理と調査の結果をリスト化し、収集年度ごとに『収蔵品目録』として刊行しております。

また、目録刊行に合わせて、博物館の資料収集活動を広く市民の皆様に知っていただくため、毎年このような『新収蔵品展』を開催し、新たに加わった品々を実際にご覧いただける機会を設けております。二六回目を迎える今回は、平成二十三年度に寄贈、寄託、購入によって収集した七三二件の資料の中から、「ふくおかの歴史とくらし」に関わる選りすぐりの資料を展示いたします。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。そしてご観覧いただいた皆様には、この展覧会を通して福岡の歴史と人びとのくらしについて、より一層の関心を寄せていただくとともに、福岡市博物館の資料収集活動にご理解とご協力をいただければ幸いに存じます。

一、桃山時代から江戸時代の筑前

天正十五（一五八七）年、九州を平定した豊臣秀吉は、荒廃した博多の復興に着手します。現在の博多の町の原型は、秀吉が行った町割に由来するものです。再建された博多は、朝鮮出兵では、朝鮮半島に向けての兵站基地として位置づけられ、兵糧米の貯蔵などが行われていました。

黒田長政書状（1）は、朝鮮へ出兵していた黒田長政が、舟陣中に向けて出した命令書です。長政は、家臣や渡海してきた舟に対して、黒田家家臣・小林新兵衛の指示に従い釜山浦より米を廻漕させるよう命じています。

小早川隆景の養子・秀俊は、文禄四（一五九五）年、わずか一四歳で隆景の跡を継ぎ名島城へ入城します。小早川秀俊知行充行状（2）は、豊臣政権の保護のもと、秀俊が遠山茂兵衛に早良郡上光行村（後の福重村）・野芥村の地を与えたものです。

関ヶ原の戦いで武功をあげた黒田長政は、筑前国を拝領します。長政は、福崎に福岡城を築城し、ここを領国経営の中心としました。城下につくられた都市・福岡は、博多とともに政治経済の中心として発展していきました。

黒田家による藩政の一端を示す資料が黒田長政書状（3）です。元和四（一六一八）年、長政が、家臣である菅正利らに雷山川河口右岸の約一二〇町を干拓した志摩郡新田開に百姓を召し集め、田畠を開作させるよう命じたことが記されています。

家紋は、武士の家柄や格式をあらわすものとして、幟、武具や袴、生活用具などに配されました。藤巴石餅紋蒔絵箱（4）には、黒田家家紋である藤巴紋と石餅紋が使われています。

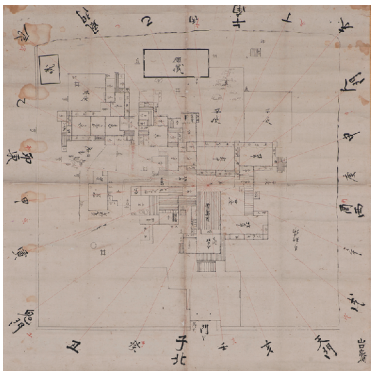
（4）藤巴石餅紋蒔絵箱

江戸時代中期になると、藩祖・黒田孝高と長政に仕えた武将を顕彰・神格化する動きがうまれ、黒田二十四騎図が描かれるようになりました。しかし、制作された絵図には、想像による人物描写も多くありました。文化七（一八一〇）年、十代藩主・黒田斉清は、御用絵師・尾形洞谷に、二十四騎図の人物描写に関する調査を命じます。洞谷は、家臣の家に伝わる肖像画や武具を調査し、それを画帖にまとめました。黒田二十四騎画帖紙形（5）はこの画帖の雛形とされ、以降の絵図制作に反映されました。

藩士の社会は、身分や家格、禄高、役職などをもとに区別されていました。福岡城下図（6）からは、それにより居住

地が分けられていることが読み取れます。

山口家屋敷図（7）は、かつて大名町（現・中央区大名）にあった山口家屋敷の配置を示したものです。山口家は、関ヶ原の戦いの後に長政に仕えた栗山琳斎を初代とする家です。跡を継いだ山口孫右衛門直勝は、三代藩主・黒田光之の側近として、京都・大坂蔵本奉行、江戸留守居役などをつとめました。歴代の当主も江戸留守居や裏判役などの役職をつとめました。



（7）山口家屋敷図

江戸時代に製作された脇差や短刀など（8・9）が伝来した加藤家は、岸弥助を初代とする家です。天正十五年、肥後の平定を任されていた佐々成政が改易されたことを機に、黒田家の家老・黒田一成（加藤一成・三奈木黒田家初代）に仕えるようになります。関ヶ原の戦いや、島原・天草の一揆で福岡藩が出兵した島原の合戦での功績により加藤姓を与えられ、二代目以降は三奈木黒田家の重臣として幕末まで家政を支えました。

藩士や庶民は、さまざまな書物を読んでいました。武術習得のための『兵法奥義書』（10）や西洋兵学書である『軍中必携』（11）は、兵学、武術習得のためのテキストでした。『再版　農業全書』（12）は元禄十（一六九七）年に刊行された農書で、宮崎安貞により編纂されたものです。これは自らの農村体験や各地の農業調査をもとに、農事や作物の栽培法などについて言及した、江戸時代を代表する書物です。そのほかにも宗像郡曲村で地域医療を担った在村医・眞武家に伝わった医学書『黄帝内経素問』（13）、小児痘診（天然痘）についてかかれた『保赤全書』（14）や、尾張の商人・菱屋平七（吉田重房）による九州の旅行記『筑紫紀行』（15）などがあります。

福岡藩には、「家業」とよばれる専門的な仕事で仕える家臣もいました。たとえば医者、料理人、武術家などがあげられます。また、幕府や諸藩の御用をつとめた絵画を生業とする人を御用絵師といい、福岡藩には、尾形家・衣笠家・上田家・石里家がありました。琴棋図屏風（16）は、上田永朴の作品です。

百鬼夜行絵巻（17）は、福岡藩の御用絵師・尾形守房が描いたものです。鉢をかつぐ鬼に続いて楽器の妖怪、台所用品や宗教用具の妖怪が次々と群れをなし、最後は日の出とともに一目散に逃げる様子が描かれています。

なお、江戸後期から明治初期にかけて活躍した江戸（東京）の浮世絵師たちも、歌川国貞「お菊亡霊実成金菊月」（18）、歌川芳艶「破奇術頼光袴垂為搦」（19）、歌川芳虎「佐藤正清化物退治」（20）のような幽霊などを題材にした作品を生み出しています。

江戸時代は、今日に続く福岡・博多の伝統工芸の発展に大きくつながる時代でもありました。博多人形は、長政の筑前入国にともない集められた職人が余暇につくった素焼き人形にルーツがあるといわれています。活躍した職人には正木宗七や中ノ子吉兵衛などがいます。明治時代には、パリ万国博覧会に出品されるなど、博多人形の名は世界的に広がりました。大正から昭和時代には、小島与一、原田嘉平、古野一春、高尾八十二などが活躍し、多くの優れた作品（21・22・23・24）を世に送り出しました。

（21）団七（小島与一作）

二、明治時代以降の福岡

最後の福岡藩主・黒田長知を父にもつ黒田長成は、貴族院議員、同副議長、枢密顧問官などを歴任する一方、自作の詩を集成したものを出版するなど詩作に熱心な一面がありました。黒田長成二行書（25）は、大正九（一九二〇）年四月五日、皇太子（昭和天皇）が市内の光雲神社、黒田家別邸を行啓したことを祝してつくられた七言絶句の漢詩です。

広田弘毅一行書（26）は、福岡県出身者で初の内閣総理大臣となった広田弘毅の書です。広田は、中学校時代に水鏡天満宮の正面入口にある石碑「水鏡神社」の文字を奉納するなど、書に優れた人物としても知られています。

戦後の混乱期の中で、国民に希望と勇気を与えることを目的として、昭和二十一（一九四六）年、第一回国民体育大会（国体と略される）が開催されました。昭和二十年代から三十年にかけておこなわれた国体に参加した選手には徽章やメダル（27）が贈られました。

昭和初期に撮影された名島飛行場（28）や、昭和三十年代に岩田屋の屋上から撮られた写真（29）などからは、福岡が発展していく様子がみてとれます。

家庭生活に目を向けてみると、戦前に流行した耐火粘土式のガスストーブ（30）にかわって、昭和三十年代には石油ストーブが普及しました。アラジン社製のアラジン・ブルーフレーム・ヒーター（31）は、昭和三十六年に『暮らしの手帖』の商品テストで第一位に選ばれ脚光をあびました。

（31）石油ストーブ

昭和四十年代から五十年代には、旅行などに携帯できる高性能コンパクトカメラ（32・33）が次々と発売され、カメラは思い出を残す道具として生活に溶け込んでいきました。

鯨髭製の釣竿（34）や郷土玩具（35・36・37・38）も、その当時の人びとの趣味を反映したものです。

早良区百道浜では、福岡市制施行百周年を記念して「アジア太平洋博覧会―福岡'89（通称よかトピア）」が開催されました。会場内には鯨幟（39）が掲げられるなど、来場者に楽しんでもらうための工夫がされていました。閉幕後、会場跡地はシーサイドももちとして整備され、テーマ館だった建物は、平成二（一九九〇）年、福岡市博物館として開館し、現在にいたっています。

三、人びとのくらし

猿の手（40）は、明治四十二（一九〇九）年、筑紫郡三宅村塩原（現・南区塩原）の森藤瀧次郎氏が購入したものです。福岡ではあまり見かけませんが、中・南九州では、猿は河童の悪戯などから馬を護る存在とされており、猿の手は、その俗信にもとづいて厩に掲げられています。

子どもが産まれると、氏神への報告と子どもの成育を願って宮参りが行われます。（41）地域差はありますが、博多では女児は生後三十日、男児は生後三十一日に行われます。生まれてはじめて迎える季節の節目にも成育を祝う風習があります。初正月には、男児は破魔弓、女児は羽子板が贈られます。桃の節供には、女児に雛人形やオキアゲ（押絵人形）などを贈り、端午の節供には、男児に兜や武者人形を贈ります。男児の場合は、さらに八朔にも祝います。

人生の大きな節目のひとつに結婚があります。昭和のはじめ頃までは、市内の劇場へ重箱（42）を持って観劇に出かける機会も多くありました。ときには劇場で親同士が偶然を装い、お互い年頃の子どもを見合わせることもあったようです。

結納飾り（43）は、婚約の証として男性方より贈られるものです。福岡では結納品のことを「お茶」とよび、結納の一品として「御知家」（お茶）を贈る風習があります。そのほかにも「子生婦」（昆布）、「寿留女」（スルメ）、「家内喜多留」（柳樽）（44）、「家慶鯛」（掛鯛）（45）など奇数の品数が床の間に並びます。結納飾りには、藁や水引で鳳凰や鶴、亀、松竹梅などの吉祥を表す細工が配されますが、現代では結納をする家庭も少なくなりつつあります。

（44）博多の結納飾り（家慶鯛）

博多では、一年を通して多くの祭りが行われています。

五月三日、四日に行われる博多松囃子は、人びとが福神などに扮して、囃子や舞を演じて家々を言祝ぎ回る正月行事に起源をもちます。博多の古くからある町組織によって続けられているもので、馬に乗った三福神（福神、恵比須、大黒）と稚児たちが博多・福岡の町中を訪問し、祝言を述べ、縁起物（46・47・48・49）を贈ります。このときに訪問を受けた家や企業は、武家の礼法に由来する一束一本（50）で返礼します。

（46～49）博多松囃子の福笹

博多祇園山笠は、七月一日から十五日まで行われる夏の祭りです。山笠で着用される法被は、山笠を舁くときに身につける水法被と、それ以外のときに着用する長法被の二種類があります。長法被は、山笠の当番町を務めるときに新調することから当番法被ともいわれています。法被には、流や町内ごとのデザインが施されており、一目で着用者の所属を知ることができます。

旧福神流上魚町の当番法被（51）は、幅の異なる白と藍の縦縞でデザインされているのが特徴です。同じ流でも下魚町当番法被（52）には、町名にちなんだ魚文様があしらわれています。

旧呉服町流萱堂町の法被は、水法被（53）と当番法被（54）でデザインが異なります。水法被には町名の「萱」の文字が背に大きく染め抜かれています。当番法被は、藍地に井桁文様を斜めにつないだデザインになっています。これらの法被は、戦後の都市計画の過程でなくなってしまった流や町のもので、現在ではみることができないものです。

盆を過ぎると、夏の終わりを告げる地蔵盆や千灯明が行われます。旧博多萱堂町では、七月二十三日、二十四日に地蔵祭（地蔵盆）が行われ魚腹地蔵尊が開帳されました。魚腹地蔵尊縁起絵（55）は、享保十一年（一七二六）年、福岡藩の御用絵師・衣笠守弘によるものです。戦前まではこのときに子どもたちによる千灯明（56）も行われていました。

秋の訪れを知らせる筥崎宮の放生会は、九月十二日から十八日まで行われます。昭和初期までは、幕出しが行われていました。博多の人びとは寄り合って、料理や酒、幔幕などを長持に入れて参拝に出かけ、参拝後は箱崎松原に場を移し、張りめぐらした幕の中で宴を張りました。博多の商家には、幕出しで使われた炊事用具（57・58・59）や膳（60）が残されていました。

出品資料一覧（文中資料のみ）

一、桃山時代から江戸時代の筑前

購入資料

1. 黒田長政書状
2. 小早川秀俊知行充行状
3. 黒田長政書状
4. 藤巴石餅紋蒔絵箱
5. 黒田二十四騎画帖紙形
6. 福岡城下図

山口武資料

7. 山口家屋敷図

加藤卓資料（追加分）

8. 脇差　銘「駿河守　盛道」
9. 短刀　銘「筑州住　是利」

白水光利資料

10. 兵法奥義書
11. 軍中必携

岡田正義資料

12. 再版　農業全書

眞武綾子資料（寄託）

13. 黄帝内経素問
14. 保赤全書

購入資料

15. 筑紫紀行

購入資料

16. 琴棋図屏風

購入資料

17. 百鬼夜行絵巻

毎日新聞社　幽霊・妖怪画コレクション資料

18. お菊亡霊　実成金菊月
19. 破奇術頼光袴垂為搦
20. 佐藤正清化物退治

松岡陽子資料

21. 団七
22. 達磨像
23. 鎌倉武士

原田嘉平資料（追加分）

24. 鞍馬天狗

二、明治時代から平成時代の福岡

松見榮助資料

25. 黒田長成二行書

松村久寿資料

26. 広田弘毅一行書「鬱々含晩翠」

菊竹智子資料

27. メダル「第8回国民体育大会参加賞」

八尋キヌ子資料

28. 写真「名島飛行場」

小林タネ資料

29. 写真「岩田屋屋上から港方面」

吉野忠記資料（追加分）

30. ガスストーブ

髙山慶太郎資料

31. 石油ストーブ（Aladdin Blue Flame Heater No.H2201）

原田久男資料（追加分）

32. カメラ（オリンパス・トリップ35）
33. カメラ（ポケットフジカ350ズーム）

仲川文教資料

34. 鯨髭製釣竿

野村健一資料

35. 木の葉猿
36. 宇土張り子（馬乗鎮台）
37. 英彦山がらがら
38. 鳩笛

酒井龍彦資料

39. 鯨幟

三、人びとのくらし

森藤誠司資料

40. 猿の手

安部和子資料（追加分）

41. 宮参り着物

小南嘉子資料

42. 提重箱

購入資料

43. 博多の結納飾り

※43は常設展示室（10. 福博人生のコーナー）でご観覧いただけます。

長澤宏昭資料

44. 角樽
45. 博多の結納飾り（家慶鯛）

藤井靖司資料（追加分）

46. 福神流の福笹
47. 恵比須流の福笹
48. 大黒流の福笹
49. 稚児流の福笹
50. 一束一本

購入資料

51. 博多祇園山笠当番法被（上魚町）
52. 博多祇園山笠当番法被（下魚町）

立石安次郎・伊平資料

53. 博多祇園山笠水法被（萱堂町）
54. 博多祇園山笠当番法被（萱堂町）
55. 魚腹地蔵尊縁起絵
56. 写真「千灯明」

楢﨑半三資料（追加分）

57. 飯櫃
58. 杓文字
59. 金属鍋
60. 高脚膳

ご協力いただいた方々

（寄贈・寄託者名／五十音順、敬称略）

安部和子　岡田祇治
加藤卓雄　菊竹智子
小林タネ　酒井龍彦
白水光利　髙山慶太郎
立石廸子　鳥越雅美
仲川文教　長澤宏昭
中野登貴子　楢﨑鉄夫
野村順子　原田久男
藤井靖司　毎日新聞社
眞武綾子　松岡陽子
松見榮助　松村久寿
森藤誠司　八尋キヌ子
山口武　吉野健也

福岡市博物館　〒八一四－〇〇〇一
福岡市早良区百道浜三丁目一番一号
電話〇九二・八四五・五〇一一